

2021年10月31日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「神はわがやぐら」

聖書：詩編46：2～12

詩編46編は宗教改革者マルチン・ルターの愛唱箇所として有名である。宗教改革という壮大な働きの中で精神をも患ったという。この箇所から生まれた讃美歌「神はわがやぐら」には、悪魔が迫りくる実体験が記されている。悪魔が彼をおとしめようと部屋に現れると、ルターは、「私は洗礼を授けられている者だ！」と言って退けたという。このことはキリスト者が大事にすべき教理である。

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦(とりで)。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」このことを信じて歩むことがキリスト者の根幹を成す大切な“信仰”というものになる。

この詩編46編は、二つの苦難が記されている。一つは、3節から7節の自然災害の苦難のこと。地震や洪水、津波を表しているともいわれる。私たちは、このような自然災害には殆んど無力だ。今年も地震や水害、台風の被害が多くあった。この自然災害は、神の業なのか？少なくとも今朝の聖書を読む限り、そうではない。「地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも、海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも。・・・」8節、「万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」とある。神は、「地が姿を変え、山々が揺らぐ」その状況にいる人々の側、「共にいます」とおっしゃっている。

もう一つの苦難は、9節から11節。ここの苦難は、国家権力による暴力に打ちひしがれている状況、国家間の戦争による悲劇を表し、また戦争を起こす権力者への裁きが言い表されている。神ははっきりと、戦争の武器である「弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる」とおっしゃっている。しかしこの世は、戦争の武器を造り続け、軍事基地を造ろうとしている。このことが如何に罪深いことか。神は、武器を砕き、折り、焼き払われると言っているにも関わらず。そして、その戦争の苦難の只中に置かれている人々へ、12節「万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。」ここに神の慰めと励ましの言葉がある。

私たちには、様々な苦難がある。あなたが苦しんでおられた時、神はあなたの側に居られ、悲しく、辛く、涙流している時、神はあなたと共に居られたのである。今、苦しみの中にある方が居られるだろうか？神は、今、あなたと共に居られるのである。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」「神は我がやぐら」と約束しておられる。(神谷)